

宮川健郎 私の出会った児童文学者たち 第 27 回  
 第 6 章 鳥越信先生  
 その 1 三つの児童文学史展（中）

1979（昭和 54）年 11 月、鳥越信先生（1929～2013 年）が監修した児童文学史展のお手伝いで、鳥越先生といっしょに沖縄に行った。私は、1 年浪人して入学した大学院の 1 年次で、24 歳だった。

### 吉田新一先生

2008（平成 20）年 4 月、私は、国立国会図書館の客員調査員に就任した。国会図書館の支部図書館である上野の国際子ども図書館に、ひと月に 2 日勤務する。任期は 3 年。ちょうど、2 番めに 10 年間つとめた大学、明星大学人文学部から武蔵野大学文学部に異動した春だった。

客員調査員の役目は二つ。一つは、国際子ども図書館の蔵書構成に意見をいうこと。これは、定期的に意見書を提出するというようなことではなくて、何か気がついたときに。もう一つは、職員の研修をすること。実際には、国際子ども図書館が年に 1 回、2 日間開催する「児童文学連続講座」のプロデュースをすることになった。

私の前任の客員調査員は吉田新一先生（1931～2025 年）、そのまた前任が神宮輝夫先生（1932～2021 年）だった。おふたりとも、英語圏の児童文学がご専門だから、今度は、日本児童文学をやっている者ということになったようだ。私を推挽してくださったのは吉田先生だと思う。

吉田新一先生は、私の恩師のおひとりである。私が立教大学文学部日本文学科の学生だったころ、吉田先生は、一般教育部の教授で英米文学科も兼任なさっていた。2 年生のときの英語のクラスは、たまたま吉田先生が担当してくださって、Alice's Adventures in Wonderland を読んでくださった。1975（昭和 50）年度のことだ。

この時代の吉田先生は、どのような状況だったのか。『学校図書館速報版』（2019 年 3 月 1 日）の先生へのインタビュー記事「こども・本 この人に聞く」にこんなふうにあった。先生の『連続講座〈絵本の愉しみ〉』全 4 巻（朝倉書店 2018～19 年）が順次刊行されていたころのインタビューだ。

吉田さんが（ビアトリクス・一宮川注）ポターの作品の研究をするようになったきっかけをお尋ねすると、話は 1960 年代の終わり、学園紛争の時代に遡った。

当時、吉田さんは立教大学で英米文学を教えていたが、学園紛争で授業ができない時期があり、ようやく収束に向かったころ、新しいカリキュラムの導入の必要があった。「英米児童文学はどうか」と提案したら、結局吉田さん自身で授業をやることになってしまった。

私は学園闘争に出口が見えてきた 1974（昭和 49）年春の入学で、大学では、いろいろな新しい試みがはじまろうとしていた。1976（昭和 51）年度に（私は 3 年生）、吉田先生は、一般教育の自由科目として通年の「児童文学」を開講されて、これは、日本の童話を読む授業だった。ゼミ形式の授業だったから、受講生の人数制限が必要で、簡単なレポートを提出して選抜が行われた。40 人ほどの、やや大きいクラ

スだったという記憶があるけれど、それでも、希望者が多くて、3倍くらいの倍率だったのではないかと。私は、3年生のときも4年生のときも受講をゆるされた。

授業は、土曜日の2時間めだった。角川文庫の宮沢賢治『注文の多い料理店』などの文庫をテキストに、みんなで賢治や新美南吉をつぎつぎに読んでいった。毎回、とても楽しみに出席した。当時の手帳の「自主休講の記録」によれば、3年生のときの欠席は3回、4年生は1回だけだ。私も何回か発表したけれど、4年生のときには「風の又三郎」について話し、これは、数年後に『日本児童文学』に掲載される「宮沢賢治「風の又三郎」紀行―“二重風景”への旅―」（1981年6月）の原型である。キャンパスで吉田先生に行き会えば、あいさつするようになり、先生も、声をかけてくださるようになった。

3年生のときには、吉田先生が絵本を語った「英米文学特講」も受講している（通年で3回欠席）。夏休みには、未邦訳の絵本を訳すという宿題が出て、一生懸命に取り組んだ。学部時代に、吉田先生の通年の授業四つを履修して、あわせて16単位をいただいた。

## 2棟めの建設と新しい課題

さて、2008年、上野の国際子ども図書館だが、客員調査員として、月に2日、9時半から17時まで勤務した。出勤すると、全館のどの書庫にも出入りできる「オールマイティ」と呼ばれるかぎをあずかった。蔵書構成に意見をいうという役目をはたさなければならないが、自分のそのときどきの勉強を持ち込んで、必要な本をさがしながら考えていった。出勤日には、ひとりで静かな時間をすごしていたのだけれど、やがて、新しい課題があたえられることになった。国際子ども図書館の資料を使って、日本の子どもの文学の歴史を通観できる展示会の監修を依頼されたのである。

2000(平成12)年5月、国際子ども図書館の第1期開館(4分の1オープン)のときに開催されたのは、「子どもの本・翻訳の歩み展」だった。JBBY(日本国際児童図書評議会)が協力して、私も、編集にかかわった。その後は、数か月のあいだ開催される、何かテーマを決めた企画展を年に二つほど、3階のミュージアムで行ってきたけれど、もっと長い期間置いておける少し大きなテーマの展示会を企画したい――こうおっしゃったのは、私が客員調査員になったときの4代めの館長、齋藤友紀子さんだ。齋藤館長は、旧帝国図書館をリニューアルした、もともとの建物(現在のレンガ棟)にくわえてもう1棟建設する提案を国にとおした人だ。そのもう1棟が2015(平成27)年に開館したアーチ棟だが、二つめの新しい建物ができるまで、ミュージアムの内容をうごかさず、一つの展示会を開催していきたいというのだ。

私は、館長の依頼を引き受け、残る任期の2年間で展示会をつくることになった。主任司書を中心に国際子ども図書館各課のスタッフで構成された8人ほどのチームとともに「突貫工事」がはじまった。

### 「鳥越年表」と架空の展示目録

国際子ども図書館が開館して10年近くたったころの私たちのこの仕事は、図書館の「棚卸し」のような面をもっていた。

展示会は、明治から20世紀末までの日本の子どもの文学の歴史を230点ほどの資料で簡潔に見せることを目標にしていた。その230点ほどは、国際子ども図書館

の蔵書目録からピックアップしたのではない。まず、鳥越信編『日本児童文学史年表』1・2(『講座日本児童文学』別巻1・2、明治書院1975年、77年)から、展示に必要と思われる本や雑誌のタイトルをひろい出していった。「鳥越年表」とも呼ばれるこれは、明治から太平洋戦争が敗戦でおわるまでの子どもの本の各ジャンルの作品の戸籍調べを徹底して行った書物である。本や雑誌のおそらく9割くらいまでが、発行年月日を特定して掲載されている。敗戦からあとの時期については、児童文学関係の事典類などを参考にしながら、タイトルを書き出していった。

こうした作業自体が明らかに鳥越先生の影響下にあるわけだが、「鳥越年表」からタイトルを抜き出す私のあたまのなかにある「児童文学史展」のイメージは、そのころでももう30年ほど前の沖縄での「児童文学のあゆみ展」だった。2年間の企画編集作業をへて、2011(平成23)年2月19日にスタートすることになる展示会「日本の子どもの文学 国際子ども図書館所蔵資料で見る歩み」は、1979(昭和54)年11月の「児童文学のあゆみ展」の「再話」だった。

「鳥越年表」ほかを参照しながら展示目録をつくっていったわけだが、これは、いわば架空のあるいは理想の目録である。つぎには、この架空の目録と国際子ども図書館蔵書目録を突き合わせた。展示に必要な資料が所蔵されているかどうかを確認していったのである。所蔵がなくて、別の資料との差し替えを検討しなければならないことも多かった。

そして、2年後にミュージアムではじまった展示会場の展示ケースには、国際子ども図書館が所蔵している原本にまじって復刻版がならんでいたり、初版ではなく版違いの資料がならんでいたり、少しごちゃごちゃな感じになった。復刻版のほうが、かえって色があざやかだったり、原本が色がしずんでいたりという、おもしろさも生まれたかもしれないのだが、それは、当時の国際子ども図書館が所蔵している資料の反映にほかならない。国際子ども図書館にどういうものがあって、逆にどういうものがないのかということも、うかがい知れるような展示にしたかった。

### 「鳥越史観」の再話と発展

展示会は、資料をひたすら刊行年順にならべ、そこから、その時々の問題を解説パネルとして切り出していくという作り方をした。刊行年順にならべるといっても、時期区分はしている。最初は、あまり古いところからではなく、雑誌『赤い鳥』(1918年7月創刊)から見てもらおうと考えて、「『赤い鳥』創刊から戦前まで—「童話」の時代」という区分にした。これもふくめて、展示会の章立ては以下のようなようだった。

- ・第1章 『赤い鳥』創刊から戦前まで—「童話」の時代
- ・第2章 戦後から1970年代まで—「現代児童文学」の出版
- ・第3章 1980年代から1999年まで—児童文学の現在
- ・第4章 現代の絵本—戦前から1999年まで
- ・第5章 子どもの文学のはじまり

このほかに、「童謡」「国語教科書と児童文学」の展示と、ここだけは半年ごとに展示替えをする「児童文学者コーナー」を設けた。特定の作家や詩人をとりあげて、

大きな展示ケース三つで見せる、このコーナーは、スタートのときは石井桃子、つづいて、2011年が没後50年にあつた小川未明、谷川俊太郎、宮沢賢治……とつづく。資料保護のために、やはり半年ごとに、展示している雑誌を同じタイトルの別の号に差し替えるようなことも展示会場のあちこちでしたから、会期の長い常設展のようなものとはいえ、少しずつ変化・成長する展示会でもあつた。

この「日本の子どもの文学」展は沖縄の「児童文学のあゆみ展」の「再話」だとしたが、それは、前回のことばでいえば「鳥越史観」の「再話」ということになる。「鳥越史観」とは、これも、前回の言いかたを繰り返せば、鳥越先生が草案を書いた「少年文学宣言」（「少年文学」の旗の下に！）『少年文学』1953年9月）がきっかけになって、1950年代の「童話伝統批判」が起こり、詩的で象徴的な「童話」を克服して、「現代児童文学」が成立したという考えかただ。「鳥越史観」を学習した私も、「童話伝統批判」をへて、日本の子どものための文学は、詩的、象徴的な「童話」から、散文的、小説的な「児童文学」へと変化していく。（宮川健郎『現代児童文学の語るもの』NHKブックス1996年）というふうに述べていた。この重要な転換点に関して、「日本の子どもの文学」展の上記の第2章の解説パネル「散文的な文章による長編」には、つぎのように書いた。

日本の現代児童文学が成立したのは、1959(昭和34)年だと考えられます。この年には、佐藤暁(のち、さとると表記)の『だれも知らない小さな国』、いぬいとみこ『木かげの家の小人たち』が刊行されています。どちらも、小人の登場する長編ファンタジーで、戦争体験が下じきになってもあります。これらは、それまでの童話の時代の作品とはまったく違うものでした。

童話が詩的で象徴的なことばで心象風景(心の中の景色)を描いたのに対して、現代児童文学は、散文的なことばで子どもをめぐる状況(社会といってもよい)を描こうとしました。現代児童文学は、かつて経験した戦争も、戦争を引き起こす社会についても書かなければならなかったのです。

先に発表された、いぬいとみこ『ながいながいペンギンの話』(1957年)は、散文的な文章による幼年童話の試みです。散文性の獲得は、子どもをめぐる事件を順序だてて語ることになり、児童文学の長編化をまねくことになりました。(引用は「日本の子どもの文学 国際子ども図書館所蔵資料で見る歩み」図録による。カッコ内原文)

解説パネルは、すべて私が書いた。「童話」や「現代児童文学」について、「鳥越史観」を少しだけ発展させて、それぞれの実質に踏み込んで書いたと思う。これは、国際子ども図書館の客員調査員をつとめていた時期、小川未明や宮沢賢治、新美南吉の童話を読み直し、考え直していたことと、かわりがあるかもしれない。大人読者のためのアンソロジー『名作童話 宮沢賢治20選』、同じく『小川未明30選』『新美南吉30選』(春陽堂書店2008~09年)を編集したのだ。

未明の「赤い蠟燭と人魚」や賢治の「銀河鉄道の夜」などの「童話」は、詩的、象徴的なことばで心象風景を描いているのではないか。それに対して、「現代児童文学」は、散文的なことばで、心のなかの景色ではなく、子どもという存在の外側に広がっている社会や、社会と子どもの関係を描く。

## 神宮輝夫先生

「日本の子どもの文学」展のスタートにあわせて催しが企画された。どなたかに展示会を見ていただいた上で講演をしていただき、私とも対談していただくような会を開催しようというのだ。おまねきするゲストは、はじめは私と同世代のだけかとも考えたのだが、思い切って、以前、客員調査員もなされた神宮輝夫先生をお願いすることにした。先生は、快諾してくださった。

先に書いたように、神宮先生は、英語圏の児童文学の専門家だ。アーサー・ランサムや、モーリス・センダックの絵本『かいじゅうたちのいるところ』（富山房 1975年）をはじめとして数々の翻訳の仕事もある。そして、日本の児童文学についても、ずっと発言なさってきた。『現代日本の児童文学』（評論社 1974年）、インタビューをつとめた『現代児童文学作家対談』全 10 巻（偕成社 1988～92年）などである。先生は、学生時代、鳥越信、古田足日、山中恒、鈴木実らとともに「少年文学宣言」を発表したメンバーのひとりでもあったのだ。

展示会がスタートした数日後の 2 月 22 日の午後、神宮先生に展示会場まで来ていただいた。展示を見てくださっているあいだ、私は、あとについて歩いていただけ、あまり話はしなかった。答案の採点を待っている生徒のような気もちだった。ゆっくりじっくり見てくださって、見終わったあと、「この作家だったら、自分なら別の作品をあげるというようなことはあるけれど、君の考えていることはわかった」といってくださった。私は、大きく息をついた。

5 月 14 日には、神宮先生に来ていただいて、展示会関連講演会「日本の子どもの文学—昨日・今日・それから」をひらいた。最初は 3 月 12 日の予定だったが、前日に東日本大震災が起こって、延期された。私が「展示会を企画して」という演題で話し、神宮先生が「新しい児童文学の誕生と発展」という講演をしてくださった。その後の対談のなかで、私は、「童話」のことを持ち出している。

宮川 童話とは何かというのを割合長いこと考えてきたような気が自分ではするのですが、現在は仮に、詩的で象徴的な言葉で心象風景、心の中の景色を書くようなものと言いたいと思っています。そう考えると、未明とか賢治ももちろんそうなのですが、現代にも童話があると思います。あまんさんや安房さんもそうだと思うのですが、童話という言葉をもんなふうにするのはどうでしょうか。（引用は展示会の図録による。図録は 2012 年になってから刊行したから収録できた。以下も同じ）

神宮先生は、「あなたの今定義なさったものは包括的で非常に良いと思います。」といってください。

展示会を開催した当時、私は、そのころはまだ刊行されていた冊子『国際子ども図書館の窓』に 5 ページほどの文章を寄稿している（第 12 号、2012 年 9 月）。「日本の子どもの文学—国際子ども図書館所蔵資料に見る歩み」展を企画して」という、この文章のなかでも、子どもの文学の歴史をたどった私は、しめくくり、こう述べている。

小川未明に代表されるような童話がすたれて、新しい児童文学になったという歴史観 — 今回の展示も基本的にはその歴史観で作っている — をこれから先

もそのまま維持していった方がいいのかどうか。今後の児童文学の動きもにらみながら、考えていかなければならないことだ。

「日本の子どもの文学」展がはじまった翌月、2011年3月末で私の客員調査員の任期はおわるはずだったのだが、急きょ、もう1年延長されることになった。展示会のようすをもう少し見てほしいということだった。2011年度、私は、客員調査員として4年めをすごしたのだ。そして、展示会は、2015(平成27)年10月31日までつづいた。現在は、国際子ども図書館のホームページの電子展示会として見ることができる。(つづく)

**付記** 宮川健郎「日本の子どもの文学——国際子ども図書館所蔵資料に見る歩み」展を企画して」(前掲)および宮川健郎「大きな小さな展示会——日本の子どもの文学」展」(『月刊うえの』2011年5月)と内容が重複する部分があることをおことわりします。